

日蓮仮名消息の年代について

—花押・署名・宛所・日付による考察—

川上 大隆

はじめに

一、日蓮の花押による年代考察の従来の論考について

二、日蓮の花押・署名・宛所・日付による仮名消息の年代考察
おわりに

はじめに

鎌倉新仏教の祖師の一人として知られる日蓮（一二二二—八二二）の書は奔放、あるいは破格といわれている。日蓮の書には曼陀羅、著述、消息など今日数多くの書が遺されているが、それらの書は目的や宛所によって一様ではなくその時々によって様々な違いがみられる。その中には年代的な書風の変遷の違いもみうけられる。文永期の消息と弘安期の日蓮晩年とでは明らかに違いがみられるのである。

ところで、日蓮の仮名消息は大部分が日付のみで年代は記されていない。年代記載のない消息については、内容や古来からの伝承などによって推定され、近年では花押の形態の変化なども年代推定の根拠とされている。しかし、改めて従来の研究を確認してみると、研究者によって推定年代は一様ではなく多くの異なりがあることに気付く。

そこで、本稿では日蓮の書の中でも奔放あるいは日蓮の人間性を端的に表すとされる消息、中でも仮名消息に注目し、花押のあるものについて、従来の説を踏まえながら、推定年代に異論のある消息を中心に、花押、署名、宛所、日付の

書きぶりの違いによって年代を考察したいと思う。

一、日蓮の花押による年代考察の従来の論考について

日蓮の花押から書の年代を考察した代表的な論考としては、山川氏、鈴木氏、山中氏の三編の論考を挙げることができる。それらの論考を列挙するにつきの通りである。

1、山川智應著『日蓮聖人研究』第二卷^①

2、鈴木一成稿「日蓮聖人の花押の変化に就いて」

—遺文系年推定の資料として^②—

3、山中喜八著『日蓮聖人真蹟の世界』下^③

以上三編の論考の内容を確認し、花押からどのように年代推定の研究がなされているのかを考察したいと思う。

1、山川智應著『日蓮聖人研究』第二卷

山川氏は本書の「日蓮聖人の花押に就いて」において、①日蓮の花押文字について、②花押による年代の考察がなされている。

まず、①については日蓮の本弟子六人の中、日照、日朗、日向、さらに中山法華経寺日常の各門流の相伝によって、日蓮の花押は梵字で一字金輪の種子^ㄨ（ボロン字）、あるいは愛染明王の種子^ㄨ（ウン字）であること、また大きく引き回す部分は九山八海、あるいは一閻浮提を表し、^ㄨ字は厥手と称し、月を表すなどの伝承があることを述べられている。山川氏の研究では日蓮の花押の文字は二種に大別され、一つは相伝にも述べられているように、一字金輪仏頂王の種子、もう一つは^ㄨ字（バン字）大日如来智法身の種子であると指摘されている。

②について、山川氏は日蓮の花押を先に述べた^ㄨ字を甲花押、^ㄨ字を乙花押の二種に大別され、甲花押は前期（弘安元年四月から六月の間に乙花押に変更）、

それ以降は乙花押であることを指摘されている。この花押の変化の時期は日蓮の曼荼羅の花押についても同様で、このことから、それまで用いられてきた『高祖遺文録』の年代の中で、五編が異なることを指摘されている。

2、鈴木一成稿「日蓮聖人の花押の変化に就いて」

— 遺文系年推定の資料として —

鈴木氏は、山川氏が指摘されたように日蓮の花押は弘安元年六月を境として字體が変化していることに支持されているが、弘安元年五月以前の花押をㄨ字とすることについては「一抹の疑を存する」とし、パン字はㄨ及び日・の音を表す二つの悉曇文字の結合であり、ㄨ字はㄨ・ㄨ・日・の音を表す四つの悉曇文字の結合であると解されている。また、字体の変化の他に日・の音を表す空点と称される部分の変化をその形から鍵手、蔵手の二種に分類して推定年代の根拠とし、これらの変化によって日蓮の消息や撰述の花押の変遷を五期に分類されている。

第一期は鍵手一期で文永五年四月五日の「安国論御勸由來」より建治二年十二月十二日「道場神守護事」まで、第二期は鍵手二期として、建治三年二月十三日「現世無間御書」より弘安元年五月二十二日「霖雨御書」まで、第三期は蔵手一期として、弘安元年六月二十五日「日女御前御返事」より約一ヶ月間の六通の遺文。第四期は蔵手二期として、弘安元年十月一日「富木入道御返事」より同三年五月二十九日「新田殿御返事」まで。第五期は蔵手三期で弘安三年七月二日「太田殿女房御返事」より同五年二月二十八日の「法華證明鈔」までである。

鈴木氏はさらに消息の日付に記された年号干支、本文の内容、他の消息との関係、筆跡の年代的变化などから考察し、遺文の年代を推定され、鈴木氏が編纂に加わられた『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下、『定遺』と略称)の中で、花押のある遺文を抽出し、年代順に配列されている。

3、山中喜八著『日蓮聖人真蹟の世界』下

山中氏は、本書第三章、第二部「日蓮聖人花押集」において、日蓮の消息の花押一八点を片岡随喜氏の推定年代順に依って並べられている。山中氏は日蓮の花押には消息と曼荼羅があるが、鈴木氏が指摘されるように、その書きぶりに違いがあるだけでなく、寸法にも著しい差異があり、曼荼羅に比べると消息や撰述の花押は概ね小型で、全体の結構や運筆上の意趣にもおのずから別異な感触を与えるものがある、と述べられている。

また、日蓮の消息や撰述の花押を弘安元年(一二七八)四月十一日「檀越某御返事」までを前期、同年六月二十五日の「日女御前御返事」以降を後期の花押として二種に大別されている。

花押の文字について、前期は従来言われているように梵字ではなく漢字の「妙」の字であるという片岡氏の説を挙げられている。山中氏は片岡氏の説を承けて日蓮の花押を推定年代順に並べられ、年代推定の根拠についてはあまり触れていないが、日蓮の署名は書風に年代的变化があり、弘安四年夏季以降「蓮」のしんによる筆端が鋭く上方に跳ね上がることを指摘されている。また、鈴木氏と二一遺文の推定年代が異なることを示されている。

以上三編の論考の内容を確認し、日蓮の消息が花押によってどのように年代の推定がなされているのかを確認してきた。そこで理解できることはつぎの点である。

まず、日蓮の花押は古来より梵字と解され、一字金輪の種子、あるいは愛染明王の種子、花押を大きく引き回す部分は九山八海、または一閻浮提を表し、の字は蔵手と称し、月を表すなどの伝承があること。山川氏は日蓮の花押を前期後期の二種に大別され、前期(甲花押)は一字金輪仏頂王の種子、後期(乙花押)を大日如来智法身の種子であると指摘されていること。これについて前期後期の二種に大別することは鈴木氏、山中氏も同様であるが、鈴木氏は前期をㄨ及び

ヨの音を表す二つの悉曇文字の結合とされ、山中氏は片岡氏の説に依り漢字の「妙」の字とされていた(後期について鈴木氏は Dh.r.Fi.Fi の音を表す四つの悉曇文字の結合とされ、山中氏は特に触れられていない)。

山川氏は『高祖遺文録』を、先の前期後期の花押の分類から五編の消息の系年が異なる事を指摘されていた。鈴木氏は山川氏の説をさらに進め空点と称される部分の年代的变化を五期に分類し、さらに消息末尾に記載された年号干支、本文の内容、他の消息との関連、筆跡の年代的变化によって年代を推定されていた。

山中氏は片岡氏の系年推定の説に依られ、系年推定の根拠についてはあまり述べられていないが、弘安四年夏季以降「蓮」のしんじょうの筆端が鋭く上方に跳ね上がることを指摘されている。また、鈴木氏とは二一遺文について推定年代が異なる事を述べられている。

ところで、花押の意味について日蓮自らは記していないため、どの説が正しいのかを確定することは困難である。しかし、三氏が指摘されているように花押の形に変化が見られるということは、花押を意識的に変更する意味があるように思われる。日蓮の花押にはどのような意味があり、なぜ変更したのかについては今後の課題としたい。

年代の推定について、鈴木氏は花押や様々な点から詳細な研究をされ、それは現在『定遺』として広く用いられている。山中氏の説も『日蓮大聖人御真跡対照録』として広く知られるところである。しかし、両氏の推定された系年には異なりが見られる。

そこで、次章では両氏が推定された年代を確認するとともに、日蓮の花押、署名、宛所、日付の書きぶりの年代的特徴から年代に異説のある仮名消息を中心として、日蓮の仮名消息の年代を考察していきたいと思う。

二、日蓮の花押・署名・宛所・日付による仮名消息の年代考察

本章では『日蓮聖人御真蹟集成』⁷⁾所収の日蓮の仮名消息中、花押のあるもの六八編を挙げ、年代の考察を試みたい。

考察方法については、まず年代の確定できるもの(年代記載のあるもの、内容から年代を確定できるもの)を第一に考え、つぎに本弟子日興⁸⁾に「こころ。一二四六―一三三三」による年代の書き入れのあるものを基準に、従来の説を踏まえながら花押、署名、宛所、日付の書きぶりによって年代の考察をしていきたい。

日蓮仮名消息六八編とは次頁の通りである。

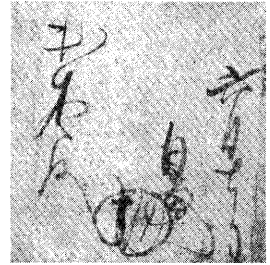
凡例

一、花押下段は書名、『定遺』、『日蓮聖人真蹟の世界』下(『真蹟』と略称)、ならびに拙者の推定年代()内)である。

一、書名は『定遺』に従った。

一、年代記載のあるものを(年)、内容から年代がわかるものを(内)、日興の年代書き入れのあるものを(書)と記載し、これらの書名をゴチック体で表示した。

一、図版は『日蓮聖人真蹟集成』第一巻から第九巻(法蔵館)より転載した。

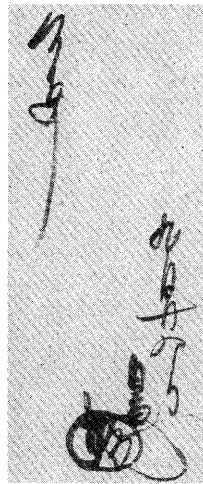


①「土木殿御消息」

『定遺』文永六年六月七日。

『真蹟』同年。

(同年)。

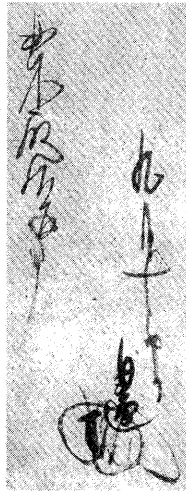


②「御衣竝単衣御書」

『定遺』建治元年九月二八日。

『真蹟』文永七、或は六年。

(文永七年)

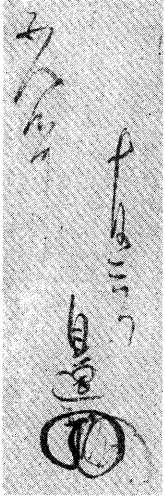


③「土木殿御返事」

『定遺』文永八年九月一五日。

『真蹟』同年。

(同年)

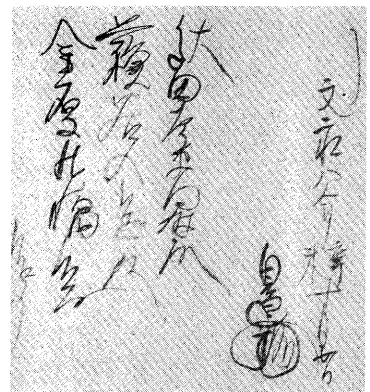


④「五人土籠御書」

『定遺』文永八年一〇月三日。

『真蹟』同年。

(同年)

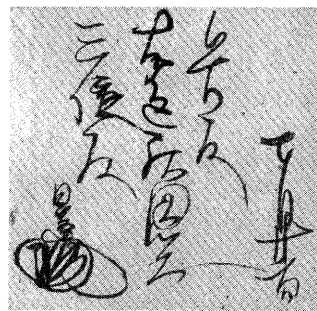


⑤「転重軽受法門」(年)

『定遺』文永八年一〇月五日。

『真蹟』同年。

(同年)。

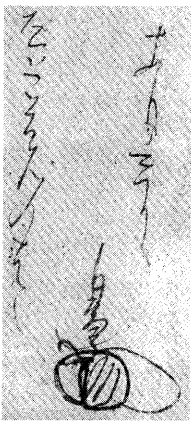


⑥「弁殿御消息」

『定遺』文永九年七月二六日

『真蹟』同年。

(同年)。

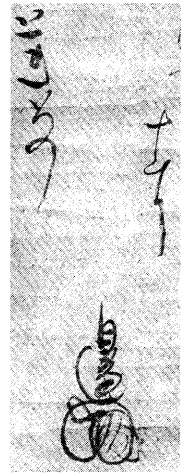


⑦「乙御前御書」

『定遺』文永一〇年一二月三日。

『真蹟』同年。

(同年)

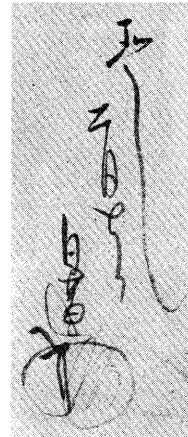


⑧「富木殿御書」(内)

『定遺』文永二年五月二日。

『真蹟』同年。

(同年)。

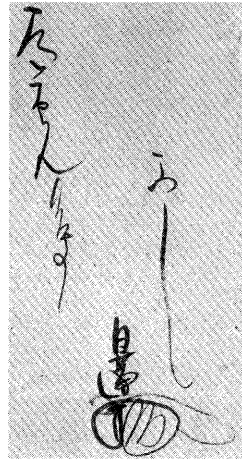


⑨「富木殿御返事」

『定遺』文永二年二月七日。

『真蹟』同年。

(同年)。

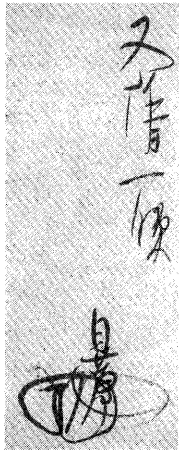


⑩「可延定業御書」

『定遺』文永二年二月七日。

『真蹟』同年二月。

(同年)

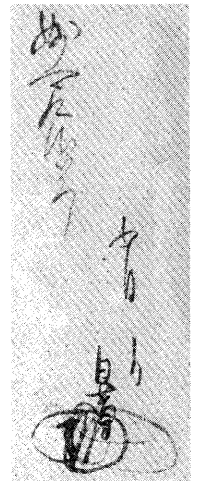


⑪「富木尼御前御返事」

『定遺』文永二年。

『真蹟』文永二年。

(文永二年)。

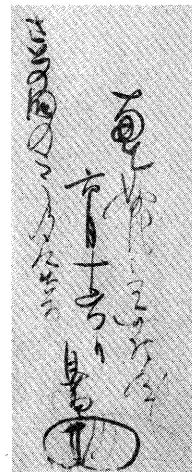


⑫「妙一尼御前御消息」

『定遺』建治元年五月。

『真蹟』同年。

(同年)。

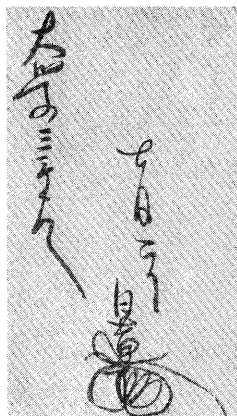


⑬「國府尼御前御書」

『定遺』建治元年六月一六日。

『真蹟』同年。

(同年)。

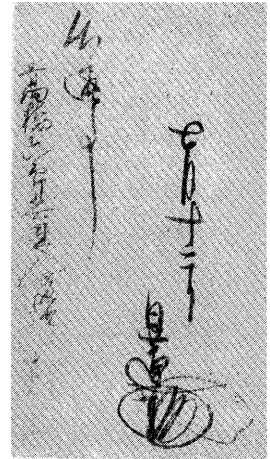


⑭「大学三郎殿御書」

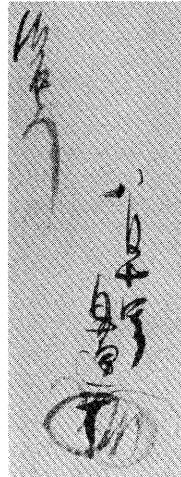
『定遺』建治元年七月二日。

『真蹟』同年。

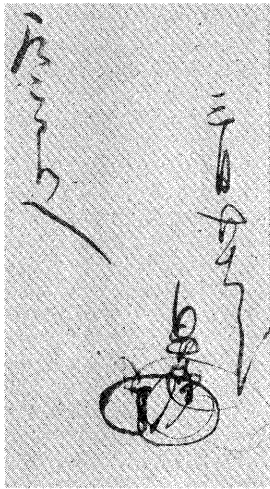
(同年)。



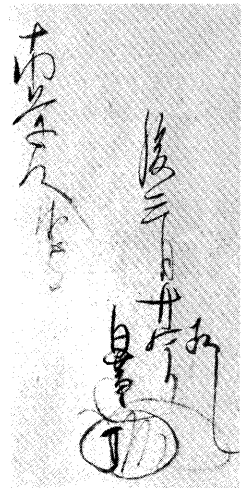
⑮「高橋入道殿御返事」
『定遺』建治元年七月二二日。
『真蹟』同年。
(同年)



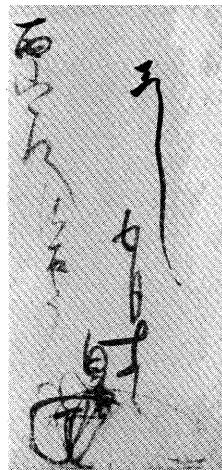
⑯「芋一駄御書」
『定遺』弘安元年八月一四日。
『真蹟』弘安元年。
(建治元年)



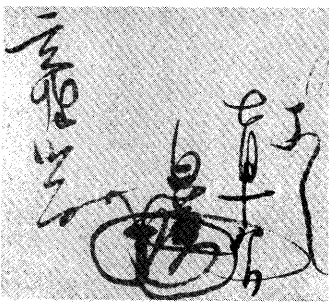
⑰「富木尼御前御書」
『定遺』建治二年三月二七日。
『真蹟』同年。
(同年)



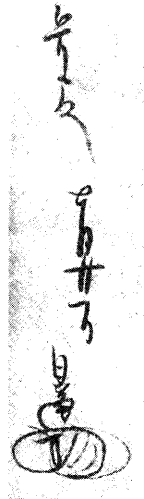
⑱「南條殿御返事」
『定遺』建治二年閏三月二四日。
『真蹟』同年。
(同年)



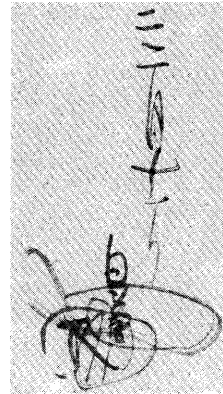
⑲「宝軽法重事」
『定遺』建治二年五月十一日。
『真蹟』同年。
(同年)



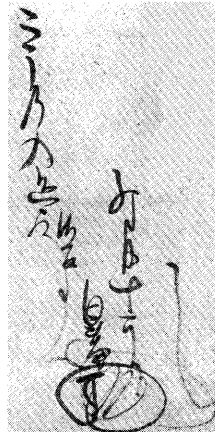
⑳「覚性房御返事」
『定遺』建治二年七月一八日。
『真蹟』同年。
(同年)



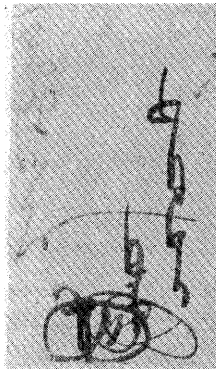
⑳「弁殿御消息」
『定遺』建治二年七月二日。
『真蹟』同年。
(同年)。



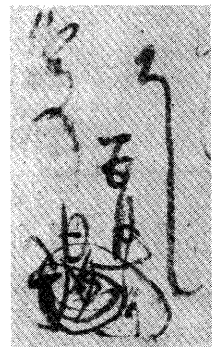
㉑「檀越某御返事」
『定遺』弘安元年四月一日。
『真蹟』弘安元年。
(建治三年)。



㉒「こう入道殿御返事」
『定遺』文永二二年四月二日。
『真蹟』建治二年。
(建治三年)。



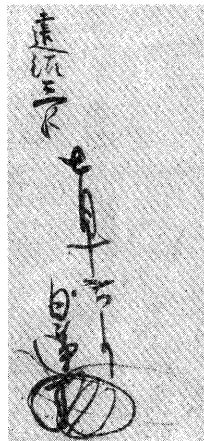
㉓「覚性房御返事」
『定遺』建治二年五月五日。
『真蹟』建治三年。
(建治三年)。



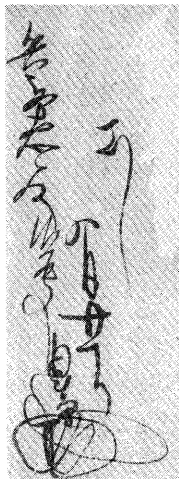
㉔「筍御書」
『定遺』建治二年五月一日。
『真蹟』建治三年。
(建治三年)。



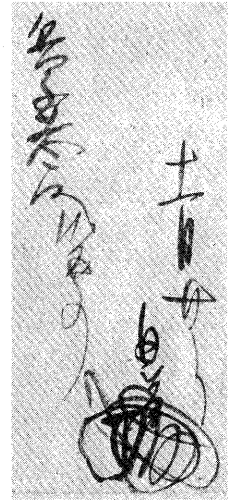
㉕「さじき女房御返事」
『定遺』建治元年五月二五日。
『真蹟』建治三年。
(建治三年)。



㉖「上野殿御返事」(書)
『定遺』建治三年七月一六日。
『真蹟』同年。
(同年)。



㉗「兵衛志殿御返事」
『定遺』建治三年八月二二日。
『真蹟』同年。
(同年)。

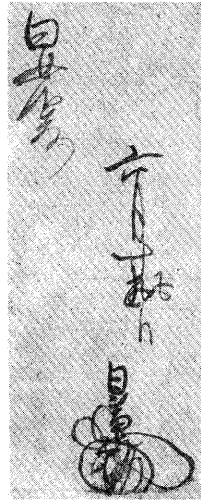


②9 「兵衛志殿御返事」

〔定遺〕 建治三年一月二〇日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

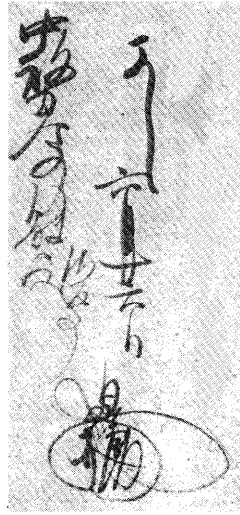


③0 「日女御前御返事」

〔定遺〕 弘安元年六月二五日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

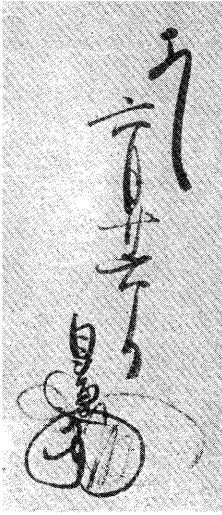


③1 「中務左衛門尉殿御返事」

〔定遺〕 弘安元年六月二六日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

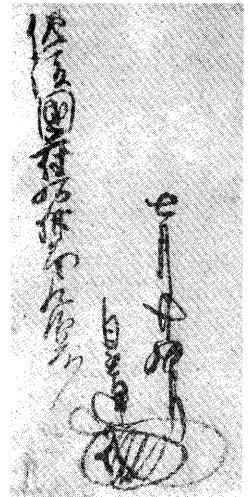


③2 「富木入道殿御返事」

〔定遺〕 弘安元年六月二六日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。



③3 「千日尼御前御返事」

〔定遺〕 弘安元年七月二八日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

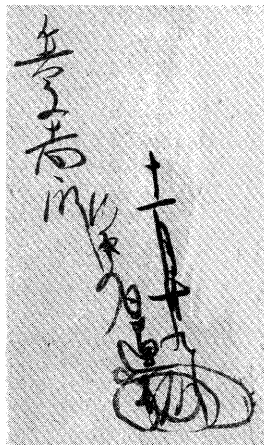


③4 「富木入道殿御返事」

〔定遺〕 弘安元年一〇月一日。

〔真蹟〕 弘安二年。

(弘安元年)

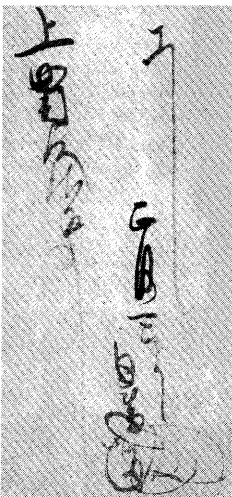


③5 「兵衛志殿御返事」

〔定遺〕 弘安元年一月二九日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

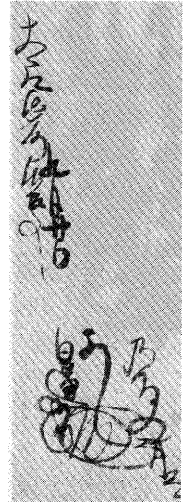


③6 「上野殿御返事」(内)

〔定遺〕 弘安二年正月三日。

〔真蹟〕 同年。

(同年)。

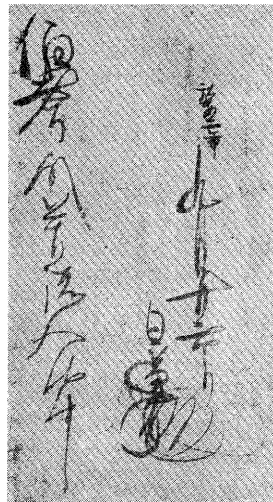


③⑦ 「大尼御前御返事」

『定遣』 弘安三年九月二〇日。

『真蹟』 弘安二年。

(弘安二年)。



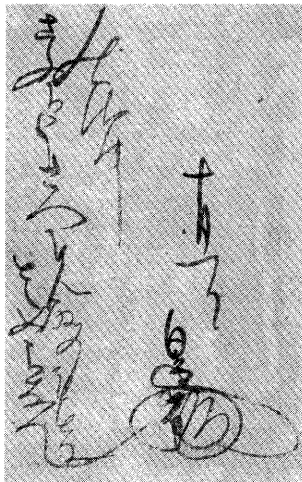
③⑧ 「伯耆殿竝諸人御中御書」

(書)

『定遣』 弘安二年九月二六日。

『真蹟』 同年。

(同年)

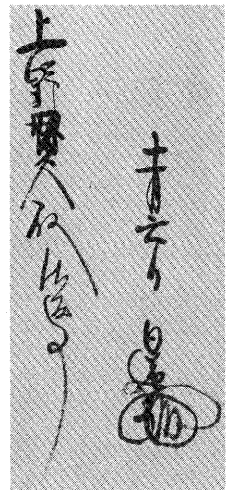


③⑨ 「聖人御難事」

『定遣』 弘安二年一〇月一日。

『真蹟』 同年。

(同年)

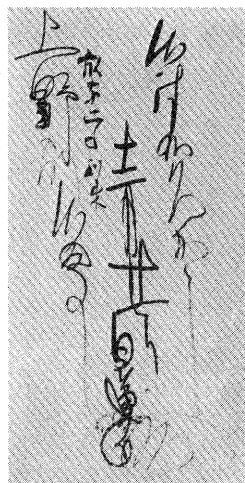


④① 「上野殿御返事」

『定遣』 弘安二年一月六日。

『真蹟』 同年。

(同年)

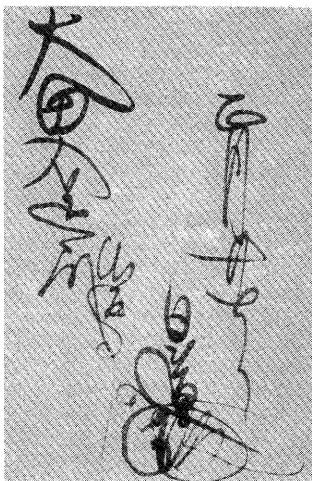


④① 「上野殿御返事」 (書)

『定遣』 弘安二年二月二七日。

『真蹟』 同年。

(同年)

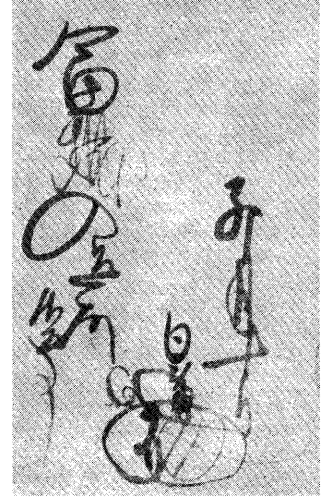


④② 「慈覚大師事」

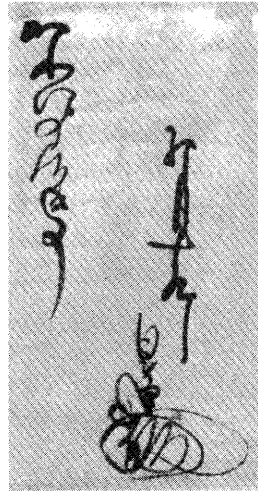
『定遣』 弘安三年正月二七日。

『真蹟』 弘安四年。

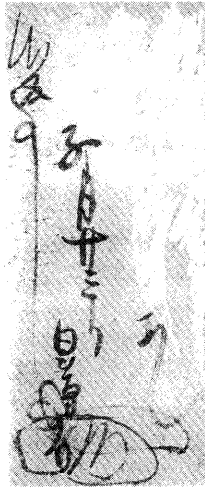
(弘安三年)



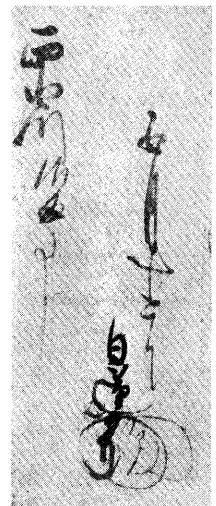
④③ 「富木入道殿御返事」
『定遺』弘安三年四月一〇日。
『真蹟』弘安四年。
(弘安三年)



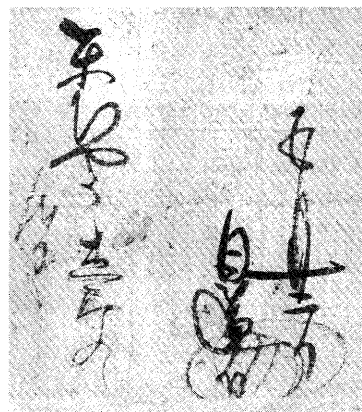
④④ 「かわいどの御返事」
『定遺』弘安三年四月一九日。
『真蹟』同年。
(同年)。



④⑤ 「陰徳陽報御書」
『定遺』弘安二年四月三三日。
『真蹟』弘安二年。
(弘安三年)。



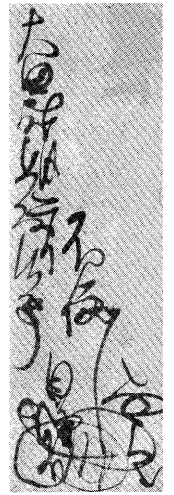
④⑥ 「西山殿御返事」
『定遺』弘安三年五月二二日。
『真蹟』同年。
(同年)。



④⑦ 「東ひやうえどの御返事」
『定遺』弘安三年五月二二日。
『真蹟』同年。
(同年)



④⑧ 「諸経與法華経難易事」
『定遺』弘安三年五月二六日。
『真蹟』同年。
(同年)

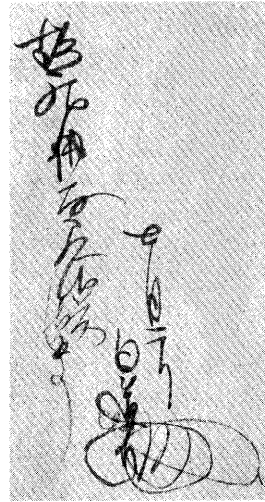


④「太田殿女房御返事」

〔定遺〕弘安三年七月二日。

〔真蹟〕同年。

(同年)。

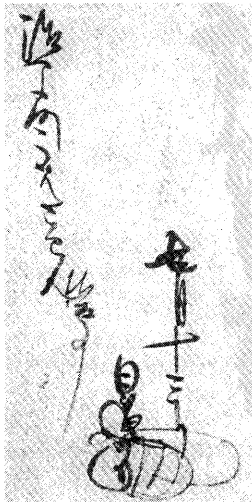


⑤「千日尼御返事」

〔定遺〕弘安三年七月二日。

〔真蹟〕同年。

(同年)。

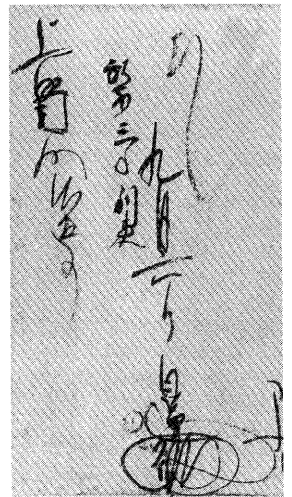


⑤①「孟蘭盆御書」

〔定遺〕弘安三年七月二三日。

〔真蹟〕弘安二年。

(弘安三年)。



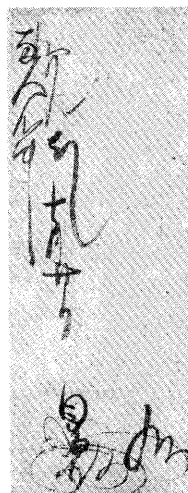
⑤②「上野殿後家尼御前御書」

(書)

〔定遺〕弘安三年九月六日。

〔真蹟〕同年。

(同年)



⑤③「兩人御中御書」

〔定遺〕弘安三年一〇月二〇日。

〔真蹟〕同年。

(同年)。



⑤④「初穂御書」

〔定遺〕弘安元年一〇月二日。

〔真蹟〕同年。

(同年)

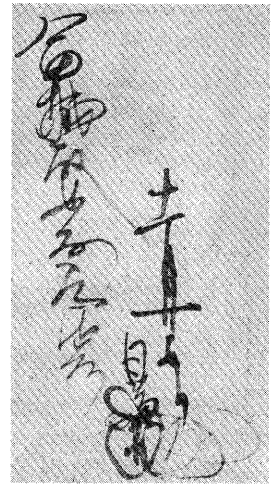


⑤⑤「上野殿母尼御前御返事」

〔定遺〕弘安三年一〇月二四日。

〔真蹟〕同年。

(同年)

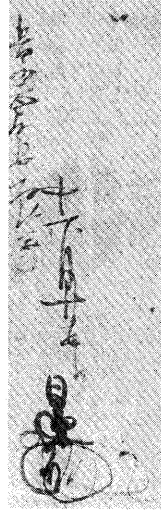


⑤6 「富城殿女房尼御前御書」

『定遺』 弘安二年一月二五日。

『真蹟』 弘安三年。

(弘安三年)



⑤7 「兵衛志殿女房御返事」

『定遺』 弘安二年一月二五日。

『真蹟』 弘安三年。

(弘安三年)。

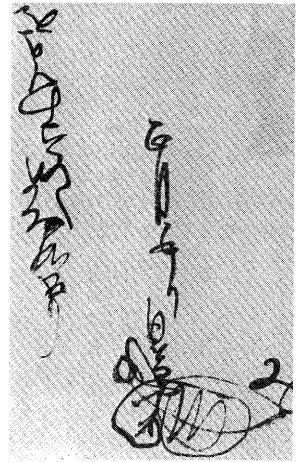


⑤8 「智妙房御返事」(内)

『定遺』 弘安三年二月一八日。

『真蹟』 同年。

(同年)

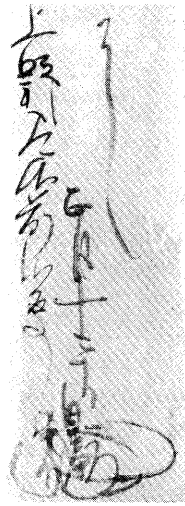


⑤9 「十字御書」

『定遺』 弘安四年正月五日。

『真蹟』 同年。

(同年)。

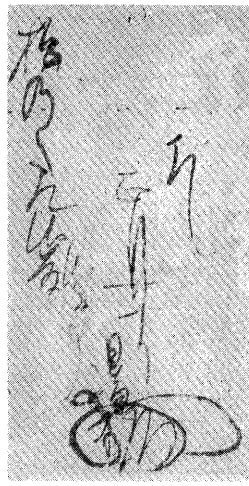


⑥0 「上野尼御前御返事」

『定遺』 弘安四年正月一三日。

『真蹟』 同年。

(同年)。

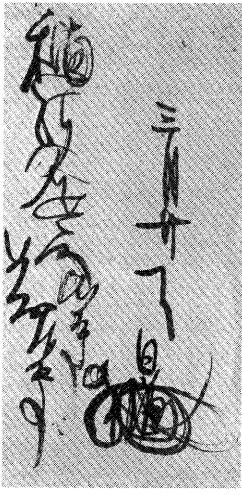


⑥1 「松野尼御前御返事」

『定遺』 建治四年正月二一日。

『真蹟』 弘安四年。

(弘安四年)。

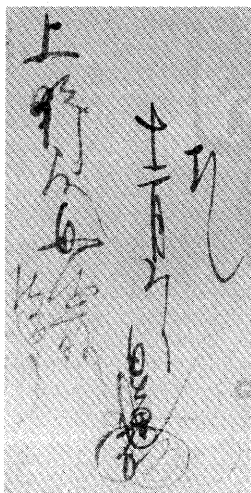


⑥2 「稲河入道殿御返事」

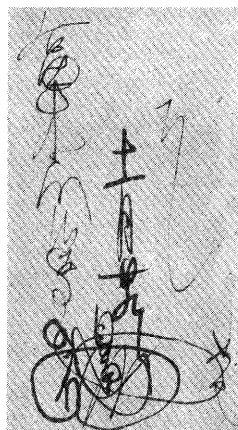
『定遺』 弘安四年三月二一日。

『真蹟』 同年。

(同年)。



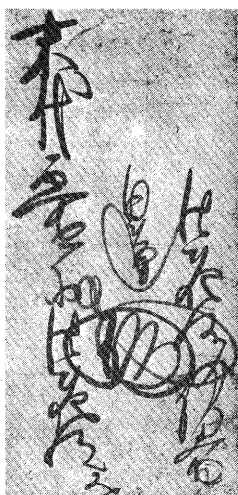
⑥5 「上野殿母尼御前御返事」
『定遣』弘安四年二月八日。
『真蹟』同年。
(同年)。



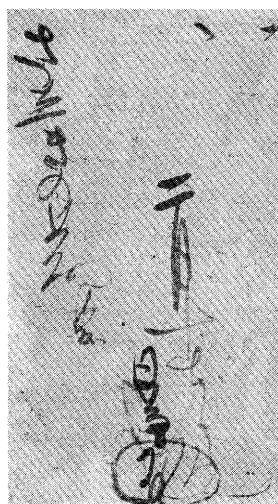
⑥4 「富木殿御返事」
『定遣』弘安三年一月二十九日。
『真蹟』弘安四年。
(弘安四年)。



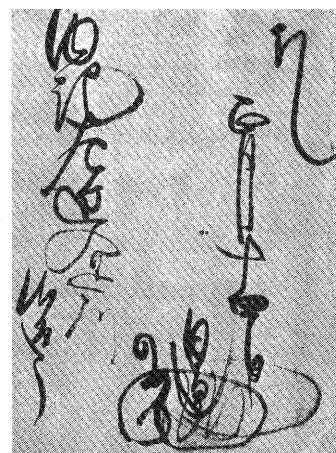
⑥3 「御所御返事」
『定遣』弘安四年七月二七日。
『真蹟』同年七月二五日。
(同年七月二七日)。



⑥8 「法華證明鈔」
『定遣』弘安五年二月二八日。
『真蹟』同年。
(同年)。



⑥7 「棧敷女房御返事」
『定遣』弘安四年二月一七日。
『真蹟』弘安五年。
(弘安五年)。



⑥6 「内記左近入道殿御返事」
『定遣』弘安五年正月一四日。
『真蹟』同年。
(同年)。

以上に挙げた六八編中、年代記載のあるものは⑤のみで、本文の内容から年代が確定できるものは⑧⑯、日興の年代書き入れのあるものは⑲⑳㉑㉒で、その他の年代は先人によって伝承されてきたものである。

本稿では、先にも述べたとおり年代記載のあるものや内容によって年代が確定できるもの、日興の書き入れがあるものを基準とする。その他は従来の研究を踏まえながら、花押、署名、宛所、日付の年代的な書きぶりの特徴によって、『定遺』と『真蹟』で推定年代が異なるものを中心に、日蓮仮名消息の年代を推定していききたい。

先に挙げた六八編中『定遺』と『真蹟』で年代の異なるものは②⑪⑭⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の十五編ある。また、考察の結果『定遺』『真蹟』と拙者の推定が異なるものは、⑯⑰⑱㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の四編である。㉓については、日付の違いであるが図版をみると七日であることが解る。

ところで、日蓮の花押や署名、宛所には年代的な特徴としてつぎの(A)から(D)の四つの点が挙げられる。

(A) 花押の特徴として従来の論考で指摘されているように、弘安元年六月を境に花押の文字に変化が見られる。

(B) 署名の特徴として、⑨「富木殿御返事」(文永十二年二月七日)から⑱「南條殿御返事」(建治二年閏三月二四日)までと、その前後とは「蓮」の草冠の書きぶりに違いが見られる。

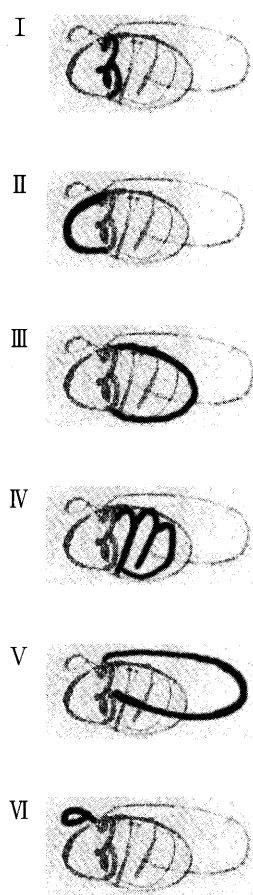
(C) 山中氏が指摘されるように弘安四年夏季以降は「蓮」のしんじょうの筆端が上に跳ね上がる特徴が見られる(図版では㉒「稲河入道殿御返事」弘安四年三月二一日以降にあたる)。

(D) 宛所の特徴としては若干の例外はあるが、㉓「伯耆殿立諸人御中御書」(弘安二年九月二六日)以降「殿」の書きぶりに変化が見られる。

以上(A)から(D)までの特徴を視野に入れて考察を試みたい。花押の考察についてはつぎのIからVIの太線部分を比較することにした。花

押の書き始め、従来の指摘で弘安元年六月を境に形が変更する部分である。またVIは蕨手、あるいは鈴木氏がその形によって鍵手と称される部分である。花押の類似点などを述べる場合にこのIからVIの記号を用いることとする。

(太線部分筆者、花押は㉑「孟蘭盆御書」)



では、先に挙げた『定遺』と『真蹟』で推定年代の異なる消息一五編について考察していききたい(丸数字は図版に挙げた消息の番号を示す)。

まず、②は花押IからVまでの形、署名の書きぶりや位置が、前後の消息①②と類似する点、日付の「月」「日」が①と類似する点から、『真蹟』同様文永七年と推定する。

⑪は(B)の特徴や⑫と署名の書きぶりや位置、花押IからVIが類似することから『真蹟』同様文永十二年と推定する。

⑲は(B)の点が⑱と異なることから『真蹟』同様建治三年と推定した。しかし、署名「日」の第一画が上部に長い書きぶりは建治二年の⑱や⑳にも見られることからあるいは建治二年とも考えられる。

㉒については(B)の点から建治三年としたが花押や署名の筆脈が鮮明でないためさらに検討を要したい。

㉖は(B)の点から『定遺』の建治元年よりも『真蹟』の三年が妥当と思われる。

㉔は花押Iが前後の消息㉓㉔㉕と類似する点。花押VIが㉓㉔と類似することから『定遺』同様弘安元年と推定した。

③7は、花押Ⅰについては⑤1に類似し、ⅡⅢⅥは④1に類似している。署名「日」の第一画の起筆、第二画から三画の書きぶりは③9④④1に類似している。「蓮」の傍の中の丸みをつける書きぶりは、③8に類似し、弘安三年の⑤0⑤1⑤2の書きぶりは異なることから、「真蹟」同様弘安二年と推定する。

④2については花押ⅠからⅤは③9に類似している。花押の形、署名の書きぶりが弘安四年正月の⑥0⑥1と異なることから弘安三年と推定する。

④3については、(C)の点から考えて弘安三年と推定した。

⑤1については、署名「日」は⑤0に類似し、「蓮」の旁やしんによりは⑤2に、署名の位置は⑤0⑤2に類似している。また、花押Ⅰは⑤0⑤2に、Ⅱは⑤2に、ⅢⅣⅤは⑤0に類似することから「定遺」同様弘安三年と推定する。

⑤6は署名「日」が⑤5に、花押Ⅰの筆路や署名の位置が⑤7と類似する点から、「真蹟」同様弘安三年と推定する。

⑤7については、先の⑤6との類似点から、「真蹟」同様弘安三年と推定。

⑥1については、(A)や花押Ⅰの筆路、ⅡⅢⅣが⑥0と類似することから「真蹟」同様弘安四年と推定する。

⑥4については、(C)の点から「真蹟」同様弘安四年と推定。

⑥7については、(C)の点から「真蹟」同様弘安五年と推定。

つぎに「定遺」「真蹟」拙者と推定年代の異なる消息について考察していきたい。

⑩6は(B)の特徴や花押ⅠからⅤの形が前後の消息と類似する点から建治元年と推定する。花押Ⅰの左下に若干筆線が見えるのは、弘安元年六月以降の特徴ではなく筆脈から花押Ⅲの延長部分であると思われる。

⑩2は署名の書きぶりは前後の消息と類似しているが、花押の形は前後の消息とは若干異なる。花押の形は一月違いの⑩6ⅠからⅤまで、また署名の位置も類似していることから建治元年と推定したが、前後の消息と考え合わせ、さらに検討を要したい。

⑩23については(B)の点から建治二年ではなく三年とした。署名の位置や蓮の書きぶりは⑩21と類似しているが、花押ⅠからⅥの形は⑩8に類似している。あるいは建治二年とも思われるがさらに検討を要したい。

⑩45については、署名「蓮」の傍、しんによりの書きぶり、花押ⅠⅣが⑩44と類似することから弘安三年と推定する。

以上、「定遺」と「真蹟」で年代が異なる消息一五編、「定遺」「真蹟」と拙者の年代が異なる消息四編について考察してきた。

前者の⑩24⑩25についてはさらに検討を要すると思われたが、その他については、ほぼ年代の推定が整理できたように思う。

後者の⑩22⑩23についてはさらに検討を要するが、⑩16⑩45については年代が推定できたように思われる。

おわりに

以上、二章にわたって日蓮の仮名消息の年代について考察してきた。そこで理解できたことを簡潔に述べてみたい。

まず、日蓮の花押による年代考察の従来の論考についてはつぎのことが理解できた。

日蓮の花押は、古来より梵字と解され、一字金輪の種子、あるいは愛染明王の種子で、花押を大きく引き回す部分は九山八海、または一閻浮提を表し、へ字は厥手と称し、月を表すなどの伝承があること。山川氏は日蓮の花押を前期後期の二種に大別され、前期(甲花押)は一字金輪仏頂王の種子、後期(乙花押)を大日如来智法身の種子であると解されていること。これについて前期後期の二種に大別することは鈴木氏、山中氏も同様であるが、鈴木氏は前期を^レ及^レ日^ノの音を表す二つの悉曇文字の結合とされ、山中氏は片岡氏の説に依り漢字の「妙」の字とされていた。

山川氏は『高祖遺文録』の推定年代を前期後期の花押の分類から五編の消息の年代が異なる事を指摘されていること。鈴木氏は山川氏の説をさらに進め、空白と呼ばれる部分を年代的な変化から五期に分類し、その他詳細な研究によって年代を推定され、現在『昭和定本日蓮聖人遺文』の年代として広く用いられていること。

山中氏は片岡随喜氏の年代推定の説に依られていること。年代推定の根拠はあまり述べられていないが、弘安四年夏季以降「蓮」のしんによる筆端が鋭く上方に跳ね上がることを指摘され、また、鈴木氏とは二一遺文について年代推定が異なる事を述べられていること、などである。

日蓮の花押・署名・宛所・日付による仮名消息の年代考察では、日蓮の仮名消息の中で花押のあるもの六八編を挙げ、その中で『定遺』と『真蹟』の年代が異なる消息一五編。『定遺』『真蹟』と拙者の推定年代が異なる消息四編について花押、署名、宛所、日付の書きぶりの特徴から考察してみたところ、四編についてはさらに検討を要するが、その他の消息については年代の推定が整理できたと思われる。

ところで、先に述べたように奔放といわれる日蓮の消息は文永期と弘安期では書きぶりに違いがみられ、明らかに年代による書風の変遷がうかがわれる。数多く現存する日蓮の消息は、花押や署名、宛所、日付などに示されるように年代によってどのように書風が変化しているのか、そして、波乱に満ちた日蓮の生涯とその書風とはどのように関連しているのかあるいはしていないのか、このように点について、今回の考察を手がかりとし、追求していきたい。

注

- (1) 山川智應著『日蓮聖人研究』第二卷(新潮社、昭和六年十月三〇日)
- (2) 鈴木一成稿『日蓮聖人の花押の変化に就て』(『大崎学報』通号一〇〇号所収、立正大学仏教学会、昭和二八年一〇月)
- (3) 山中喜八著『日蓮聖人真蹟の世界』下(雄山閣、平成五年五月二〇日)
- (4) 鈴木一成著『日蓮聖人遺文の文献学的研究』(山喜房佛書林、昭和四〇年四月八日)にさらに詳細な考察がなされている。

(5) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』全四卷(昭和二七年一〇月一〇日)

(6) 『日蓮大聖人御真蹟対照録』上中下(立正安国会、昭和四二年四月二八日)

(7) 『日蓮聖人御真蹟集成』全一〇卷(宝蔵館、昭和五一年九月二五日)

(8) 伯耆房はうきまらまたは白蓮阿闍梨びやくれんあしりという。正嘉元年(一二五七)のころ『立正安国論』執筆のため岩本実相寺の経蔵に入った日蓮と出会い、弟子になったと伝えられる。弘安五年(一二八二)日蓮は入滅に際し、本弟子六人を指名するが日興はその一人である(『日蓮宗小事典』宝蔵館、昭和六二年八月二五日、一五六―七頁参照)。

付記

本稿を執筆するにあたり、大学院博士課程担当の安達直哉先生に丁寧なるご指導をいただいた。先生に心から感謝申し上げる次第である。